

Poe 研究

Berenice を起点として

重 松 卓 未

序 文

The Philosophy of Composition の中で Poe は彼独得の作詩論をあます所なく展開している。彼の定義は極めて簡明であって詩の目標は美であり散文のそれは真であるとのべている。

この論に対する反対は大きく二つに分類出来る。第一のそれは本質的に彼の文学を否定しようとする反対である。第二の反対はそれが *The Raven* の作詩過程を説明しているようで実は嘘であるとするものである。

然し芸術の究極の目的が美の創造である事は否定出来ない。彼の世界の究極に美というものの存在を否定する事は出来まい。その意味で彼の論が本質的に誤であるとは云えぬ。

彼の作詩論のとおり *The Raven* が創られたのかという点に疑問が生じる事は当然である。だがこの作詩論がその詩の構成とその本質を、そして又彼の創造した世界を簡明に説明するものである事はあきらかである。誰もそれを否定出来ない。*The Philosophy of Composition* は *The Raven* の解説としては最上のものであり、同時に彼の世界を説明するすぐれた手引である。然しそれは完全ではない。それで充分だとは云えない。

詩の目的は美であるとする論は正しい。美それ自体は抽象的なものであるから、美とは無色透明な結晶体であらねばなるまい。美とは限定されないものであらねばなるまい。とすれば「～の美」という表現は完全なる美へのアプローチの一つの方法にしかすぎないのではあるまいか。

Poe が美それ自体について解説しなかったのは正しい。又彼が美は必然的に読む人の涙をさそうという表現も正しい。美は何らかの形で人を感動させ

るものであり、涙ぐませるものである。然しそれがすぐに「今は亡き美しきひとの追想に涙する詩人」と飛躍する理由にはならない。

読む人をして涙ぐませるものは必ずしも涙する人に対する sympathy だけではないはずである。壮大なるもの、崇高なるものに接しても人は涙する。

要は美へのアプローチの方法の差が存在するという事である。それが文学であろうと、彫刻であろうと、絵画であろうと、あらゆる芸術において作者の特異性というものを確立させる。即ちその作者独得の作風というか、独得の世界を作りあげるのである。

Poe が全く理路整然と書きあげたつमりの *The Philosophy of Composition* もその論理の飛躍という点において、実は彼自身の世界の内部からの自己の世界の称賛でしかなかった。それは彼の特異な世界をわれわれに示してはいるが説明を依然として拒否する。

私はこの論理の不連続の所にこそ Poe の世界の解明の鍵が存在する事を感じる。その点を追究するという事は結局彼の作品の背後の世界の追究である。

Berenice という短篇を起点として彼の世界への追究は又同時にそれに到りつた彼の作家精神の追究も何時の日にかなされねばならぬ事を要求している。

[1]

‘Misery is manifold...’ で始まる *Berenice* は1835年に *Southern Literary Messenger* に発表された作品である。この時期の Poe はすでに2年前に *M. S. Found in the Bottle* で懸賞を得ていて一応作家としてその本格的な活動に入っていた¹⁾、1831年の詩集の発行後1845年の詩集発行に向って努力していた時期と考えられる。

1) Cf. Quinn: *Edgar Allan Poe*, (New York, 1941) pp. 202~203.

「人の世の悲惨は数限り無い。この世の悲しみはさまざまである。広い地平線の上に虹のようにまたがり、その色合いは虹のごとくさまざまだ。……人の世の悲しみは広々とした地平線の上に虹のごとくかかっている。」という冒頭の部分で彼は虹を引用している。何故彼が虹を連想したのかよく判らないが彼の詩の中にも **rainbow** はほとんど用いられておらず、この作品の中でも虹という言葉それ自体は何ら展開されて行く大きな要素になっていない。ただ彼は様々な色彩を持つ虹というものを直観的にとらえているにすぎない。

その虹の色すべてが何らかの意味で人生の悲惨につらなって行くという彼の説明は、彼の世界の特異性を明らかに示している。

普通虹を見て涙するという事は異常であると考えてもよからう。虹を見てむしろ人は心のやすらぎを覚え、心がはずむはずである。虹を見て悲しむうというこの物語の冒頭が即ちこの物語の基調の悲哀の物異性を示しているといっても過言ではあるまい。

彼の作品を色彩という面から研究する時に必ずとり上げられねばならない「赤き死の仮面」の中の七つの部屋の構想がこの部分から始まっているという事は容易に推察出来るが、われわれにとって興味深いのは *The Masque of the Red Death* の中に展開される七色が決って科学的なものではないという事である。即ち **blue, purple, green, orange, white, violet, black with scarlet** という色彩の提示である。

色彩というものはどうしても作者の主観的なものになると考えられるが彼がもっとも恐ろしいと考えた色彩は最後の **black with scarlet** であろう。特に「赤き死の舞踏」では **scarlet** が恐怖の最高を示す色であった。

この **blue** から始まって **black with scarlet** に至る配列はその順序によって恐怖が高まることになっているが、面白いのは「白」という部屋があることである。

white が特別にあげられている反対に何故彼が **yellow** をあげなかったかという事もこの詩人の特別な嗜好を示している。

私は今ここで **yellow** の欠如の原因を追求するつもりはない。ただ **white** の存在を特に指摘するだけである。*Berenice* の中で Poe は只単に **rainbow** を悲惨のシンボルと表現したがその色彩を明示してはいない。更に *The Masque of the Red Death* では七色を示したがそれが **rainbow** のそれであるとは云っていない。

だが色彩という面ではこの二つの作品は互に相補いあっている事を忘れてはならない。

後に **black with scarlet** という色彩は *The Black Cat* の中でその最高の恐怖を示す事になる。妻の屍体の上に乗って真赤な口を開く黒猫の持つそれである。

Poeの世界の色彩を説明する **key word** である **rainbow** が初めて用いられた作品としてこの *Berenice* は注意されねばならないし、白という色が持つ特異な恐怖が *Berenice* の白い歯という形で提示されている事も面白い。

白という色が恐怖をもたらすという考え方はなかなか理解に苦しむ所であるが、Poeの世界のもつ漆黒の世界の中では白は恐怖をもたらすのである。そこに彼独特の色彩感があるのだと思う。

Coleridgeの作品からの影響も充分に考えられるがこの点については後の項で述べる事とする。

[2]

「何故私は美より醜さを予想し平和の状態から悲しみの微笑みを見るのであろうか」という文句は彼のたえず不安な、それ故に **critical** な魂を示している。

彼の世界の根底を構成するのは批評の世界である。それは安定の中にともすれば不安を美の中に醜を、永遠の中に崩壊を発見する批評精神である。

すぐれた批判精神は他にさきがけて崩壊を予知する。えてして安定の中に呪を見、不安の中に安定を見がちである。人間の持つこのすぐれた能力は同

時に恐ろしい人間破壊の原因ともなり得る。

Poe の世界の特異性はこの人間の魂にひそむ不安をえぐり出した所にある。その部を遠慮会釈なくえぐり出したのである。*Tell-Tale Heart* とか *The Black Cat* はそう云う人間の理性ではどうしようもない恐怖をテーマとした物語である。

Poe にとってはその対象物が生命の力にあふれている事は我慢出来なかった。その描く物が人間であれ、物体であれそれ自体の意志を持ち生命を持って動くことには耐えられなかった。それ故にすべての物を破壊しあらゆる生命を絶つことによって奇妙なやすらぎを覚えた。

The Fall of the House of Usher はいろいろなテーマを持つ物語であるが、要するにそれはすべての物体の破壊とすべて生きとし生けるものの死の物語であって、彼の世界を支配する鉄の如き法則の物語である。あらゆる物が死に絶えそして沼の中に沈んでしまった時彼は初めて安心する。その一切無の暗暗の世界にかすかに沼から発する微光が彼の世界の美である。

彼の作品のすべてにおいて生命を持ち生生として活躍する物はすべて不安を象徴している。飛び行く天使 *Israfel* も掌から落ちる金色の砂もうち寄せる波も不安を象徴している。「見よ死がそこに君臨する。」という *The City in the Sea* とか *Coliseum* のような廃虚の中に立って始めて筆がふるえるのである。

Berenice が若く健康な乙女の美に輝やく時彼女は決して彼の愛を引く事はなかった。突如として彼女が病み衰えその輝くばかりの美しさを失った日に初めて彼女は彼の愛を得る。

この怪奇なる事実を淡々と語る「私」は又極めて特異なる存在であって¹⁾ 後にもふれるがこの「私」自体も奇妙な変化を体験して行くのだが、その事実をまるで第三者の如く表現して行くのが Poe の「散文においては真実がその目的である。」という事になるのかも知れない。True というより Correct

1) Cf. Lsetter to Thoma W. White, 1835. Ostrom, ed., Letters (New York 1966) pp. 57~58

といった方がよさそうである。

然しこの「私」自身についての同じように Poe 的世界への導入過程は又項を改めて検討して見たいと思う。

[3]

本文を始める前にラテン語で「もし君が恋人の墓を訪ねたら少し気が晴れはしないか」という部分があるがこの文句は元来アラビア語であるトルコの大臣がその女奴隷の死を悲んだ時のものだという説があるが、その由来はともかくこの怪奇な物語の序として面白い。

女性の死という事をテーマとした作品は極めて多く、彼の作品の中の女性は死という事を前提として登場して来るようなものである。

Berenice の中で「私」は「この部屋で生れたが私が生れる以前にすでにここに生きていなかったというのは怠慢である。諸君はその事を否定するであろうが私には確信がある。然し私は人を説得しようとは思わない。私には追いかう事の出来ない記憶がある」と述べているが、この魂は前世から存在するという事をモチーフにして書かれた作品に婦人名をつけた三つの作品がある。

Morella (1835年)、*Ligeia* (1838)、*Eleonora* (1841) のそれである。勿論 *Berenice* (1835) はその初めであるが、この作品にはそのモチーフは第二義的なものにしかすぎない。

然し女性と結びつかないという点を除いてこの考え方をはっきりと表現して説明しているのはこの作品が初めてであって、その点で私はこの箇所は特に注意を払う必要があると考える。

「破壊と死」の彼の世界に「靈魂の不滅」というテーマが存在するという所は大変な事である。然し大変な事であっても存在する事実は否定出来ない。とすればここで彼をしてこういうテーマを抱かしたのは元来本質的に彼自身の作家精神なのか、それとも彼に余儀なくそうさせた何かがあったのかと疑

うのは人情の然らしめて所である。

この上なく美しい博学多才な *Morella* は死んで再びその子の中に復活し、*Ligeia* はこのモレラ的美を更に拡大した女性であって、モレラ美の極致プラス音楽の才能を持つ女性であるが死後復活して他の女性となって再び主人公の妻となる。*Eleonora* も同じであるが、彼女の描写は前二作とまったく異質であって自然の中に拡大されているのではあるが同じく死後復活して主人公と結婚する。

これに似た様なテーマを取扱った作品がその当時他にもあったと考えられるが、*Quinn* の説明の様に、*Eleonora* を出版する前に彼が13才の少女と結婚した事を強く非難された故にその回答としてこの作品をかいたという説は真に当を得たものと云えよう¹⁾。

だがどうもそういう説明だけでは何か不足する感がしないでもない。Poe の作品の中の女性像という問題になるのであるが、当然幼くして失った母親に対するマザーコンプレックスという問題を第一にして、次に養母であってこれ又死んでしまった *Mrs. Allan*、うらぎられた初恋の人 *Royster*——この人だけは彼は死ぬる直前に奇しき最後のロマンスの花を咲かせるが——その他にも *To Helen* の捧げられた彼の幼なかりし日のアイドルであった親友の美しき母の急死という度重なる不幸というものが彼の心に色濃い影を積み重ねて行った事は重要な事実である。

そういう一連の幼ない日の出来事が彼に対して重大な影響を及ぼし、女性一死一美というサークルを形成しそれが特定な作風の構成にあづかる所大である事は自明の理である。

前にあげた *To Helen* にせよ、彼の死後プリントされた *Annabel Lee* にせよ、その対象が単に一人の特定の女性であることは考えられない。それは死すべき宿命を持った女性群にささげられた愛と死の詩である。

とすれば彼の魂の復活を、特にそれを女性に特に応用しているという点からも判断して、只単に自己の生活上の便宜の上からのみ自己の作品のテーマ

1) Cf. *Quinn: op. cit.*, p. 255.

にしたことは考えられない。即ち彼は本質的に、換言すればその作家精神にもとづいて女性の魂の復活という事を信じていたという事になる。

別の角度から考えれば靈魂不滅は肉体を失なはなければ成立しないという事にもなるからその事自体は破壊と死の彼の世界に奇妙にも共存し得るわけである。かくの如く Poe は靈魂の不滅を信じていたのではあるが、彼は「然し人を説得しようとは思わない」と云ってしまっている。

彼における前世の存在の確信が主として美しき女性に向けられ、それが自分をも含めた人類全体に適用されて人間の *salvation* になっていない所が Poe の Poe たる所以であって、彼が生臭坊主にならなかつた所に彼の作家精神の健全さというものを感ずる。

Berenice の中で Poe ははっきりと人の魂の復活を述べ、次に表わす女性像を冠した三篇を予告したという点も注目に値するのである。

[4]

この作品の中で「私」であるエグスが白中夢のとりことなつて何の意味もない物にとりつかれ日がな一日ぼんやりと過す所はこの作品のクライマックスであつて、その結末の部分にまさるとも劣らざる圧巻である。

このモノマニャックな凝視はそのよつて來たる物は彼の阿片の常用かも知れない¹⁾、事実初めの印刷ではその旨記されていたものが後に除去されている所からもそれに誤は無いと思われるが、然しその事実の正否はさておくとして、問題はこの凝視の持つ彼の作風の理解が先決であらう。

この狂人のそれにも似た凝視が彼の世界を構成する基本であると云つても過言では無い。彼の作品の中に投ぜられるすべての物がこのモノマニャックな凝視によつて分解されバラバラになつた要素から又新らしき生体に改造されて彼の世界にふさわしき存在となる。

だから彼がこの *Berenice* の中にくわしく述べているモノマニャは彼の他

1) Cf. Harvey Allen; *Israfel*, (New York, 1949), p. 371.

のすべての作品の中の主人公が抱く宿命にも似たものである。私が *Berenice* を Poe 的世界への導入の主要なる一つとしてあげた理由は他のすべての理由に先がけてここにある。

すべての散文、時には詩にもそうだが、その作品の中にこの凝視し分解する「私」即ち Poe が存在する。その存在の確立という事が前にもふれたが、Poe の説く所の「散文の目的は Truth である」という事かも知れない。

正気の沙汰とは思われぬ「私」の崩壊——例えば *Tell-Tale Heart* とか *The Black Cat* とかの中のそれ——を冷然として描写して行くのはこのモノマニアックな凝視なのである。それは *Berenice* の中で初めて一つの工夫として取り入れられているがその説明は彼の世界の最大の特徴を示している。

従ってそれが Poe の伝記的な面において彼が阿片を常用していた事の証拠であるという議論以前に彼の世界を構成する最大の要素である事を忘れてはなるまい。

その狂気じみた凝視を子供じみた物と一笑にふするか、又は天才のみの持つそれと考えるかによって Poe の作品に対する評価が決定される。

これがアングロサクソンの批評に終るかフランス的な感動になるかを決定するのではあるまいか¹⁾。こういう一言で決定してしまうのは何かどうも飛躍しすぎるようではあるが、結局の所、抽象画的なものを眺めてつまらない子供じみてると批評するのと、素晴らしいと云って感動するのとの差のように思われる。

この白昼夢が彼の世界の大きな要素であるとするれば、それを彼はどこで発見したのか、という事が問題である。*Berenice* の発表された 1835 年の前年に Coleridge が死んでいる。Wordsworth には批判的であった Poe は Coleridge には敬意を持っていた。*The Rime of the Ancient Mariner* を読めば、この詩に若き Poe がどれ程感じたかを容易に推察出来る。

そこに描かれている波も無く風の吹かない死の世界、そして躍動する生の世界は Poe に決定的な影響を与えたものと云えよう。

1) Cf. Qirinn : *The French Face of Edgar Poe* (Nen York 1957) pp. 10~14

中でも *Death* とダイスをふって勝負を争う *Life-in-Death* は Poe の心を強く引きつけた。即ち肉体は死んでいるが精神は生きているという *night-mare* の登場は「老水夫行」の中での圧巻である。

Colidge のそれは *Life-in-Death* であるが、この作の主人公のそれは *Death-in-Life* である。もっとも *Coleridge* はその *Epitaph* で *Death-in-Life* の存在をのべている¹⁾。

とるにもたらぬつまらない物に日がな一日心を奪われて暮らすモノマニアのとりことなった男は即ち *Death-in-Life* にみこまれた衰れなる存在である。

Berenice の中で Poe はこの状態をあます所なく描き出している。ある一つの言葉に心ひかれその単語の発音をいく度もくり返し、遂にその語の伝える意味が全く無となり単なる音の連続でしかなくなり、原稿用紙のすみにほどこされた模様に心奪われてじっと見つめたままで一日を送り、遂には自己の存在すらも失ってしまうその主人公は *Death-in-Life* に呪われた存在である。

若くして輝くばかりの美しさを失う *Berenice* は反対に *Life-in-Death* におそわれたのである。

Coleridge の *The Rime of The Ancient Mariner* からその部分を引用してみると

Her lips were red, her looks were free,
Her locks were yellow as gold:
Her skin was as white as leprosy,
The Night-mare *Life-in-Death* was she,
Who thicks man's blood with cold.

致命的な病にある日突如として襲われその肉体の美しさを奪われてしまった *Berenice* はその漆黒の髪の毛が黄色く変っていくがその過程はこの詩か

1) Cf. *Epitaph*: — “That he was many a year with toil of breath
Found death in life, may here find life in death!”

らの影響があると考えられる。彼女は度々死と間違えられる昏睡状態になるのであるがこの事が生きたままの埋葬という恐ろしい事の原因となるのである。

Life-in-Death は又別の角度から考えると女性を媒体として取り上げられる靈魂不滅のテーマと同一のものであるとも云えよう。即ち肉体の死と精神の存在という点においてである。

かくの如く **Poe** は明らかにこの作品の中に **Coleridge** の影響を示している。日中夢にふける主人公エグスは **Death-in-Life** に、**Berenice** は **Life-in-Death** に呪われたのである。そしてこの **Night-mare** はこれから先も永く **Poe** の世界に君臨する存在となるのである。

同時に **Berenice** の齒の持つ白の恐怖が **Life-in-Death** の持つ白のそれである事が明白となるのである。

[5]

前項にもふれた所であるが、もう一つこの作品の中に見られる要素は **burial in life** である。この事のみを取り出して考える事は余りにもグロテスクという感じがしないでもない。だが実際に作品の中で具体的な場において読むとその必然性というものがあるようだ。即ちベレニスの病気は度々彼女を昏睡状態にさせその様子は死の様子と殆んど変わらないのである。

Berenice の埋葬は女中が彼女の死を告げた事によって始められたので彼女がなお生きている事を主人公は知らない。この点はアッシャー家の崩壊の場合と違って根本的な人間性の否定にはつながらない。

だが **burial in life** は人間の原始的な恐怖である事はすべての人の認める所である。多少子供じみているがこの事も人間の魂にひそむ恐怖の重要なものとして取り上げられねばならなかったのであろう。

だがこの事自体は読者にとって極めてショッキングな事である **'The sentiment awakened is that of horror than terror, and the tale fails**

for that reason.¹⁾ という批評になるし Poe 自身 がその点について弁明せざるを得なくなるのである²⁾。

〔結 論〕

以上私は *Berenice* の中から (1)彼の世界をいづる虹を基調とした七つの色彩の幻想の特異性(2)美の中に醜さを見、安定の中に不安を見る作風(3)靈魂の不滅を信じていた点(4) *Death-in-Life* と *Life-in-Death* を取りあげている点(5) *premature burial* を扱っている点。と五つの特徴を取り上げた。

それはこの作品の中にすでに Poe 的世界の特異性の萌芽があます所なく存在する事を指摘し、その故にこの作品は Poe の他の作品のいわば導入の役目を果している。

ただそれは詩の世界への導入はしていない。あくまでも散文の世界のそれである。そして他の後の作品で十分に補足して展開される要素もあるし、又ばかされてしまっている点もある。色彩などの点はこの作品を土台としているが (3) (4) の点は後者に属する。

この作品自体が Quinn の云う如き駄作であるとは云えまい。この作は多少原始的恐怖というものにみちているが見事な効果をあげているといえよう。けれどもこの作品が彼の代表的作品の中には決ってあげられない事も認めざるを得ぬ。

余りにも多くの後に展開されるべき要素に富みすぎていてそれらが融合していないうらみがある。だがその故に私はこの作品が重要であると思う。生のままの未成熟の要素を取り上げやすい作品として注目に値する。

Berenice はともすれば *Morella* 以下女性名を冠した作品の前駆としか考えられない傾向があるが、それは大きな誤であって単なる *Morella* の筆なしではない。

それはこの後に出来る華麗なる幻想の世界を創造して行く極めて重要な一過程である事を忘れてはならない。

1) Quinn: *op. cit.*, p. 213.

2) Cf. Letter to T. White, *op. cit.*, pp. 57~58.